

棚田学会通信

第68号 目次 2022年10月31日発行

つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～の取組について	2
棚田と生物多様性	3
美作市上山地区の棚田、これまでとこれから	4
先人が守り、伝えた想いと「今」	6
寒川の棚田から久木野校区の棚田群へ	7
つなぐ棚田遺産に選定されて	8
事務局ニュース	8



「広内・上原地区の棚田（福岡県八女市）」
 (提供：中島淳氏)



「よみがえった八伏棚田（岡山県美作市）」
 (提供：水柿大地氏)

特集：つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～



「寒川の棚田全景（熊本県水俣市）」
 (提供：沢畑亨氏)



「棚田カードにを使った写真（新潟県上越市）」
 (提供：高木桂氏)

棚田学会通信 68号では本年2月に選定された「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」（ポスト棚田百選）を特集します。今号では、選定の実施主体の農林水産省、選定委員会の委員の先生方、選定された棚田において保全活動に尽力されておられる方、それぞれに寄稿頂き、特集を構成しました。本特集が棚田地域と棚田に関わる人々をつなぐ一助になれば幸いです。

(棚田学会編集委員会)

つなぐ棚田遺産

～ふるさとの誇りを未来へ～の取組について

農林水産省農村振興局農村政策部地域振興課
中山間地域・日本型直接支払室

平澤 林太郎

1 はじめに

日本の棚田の多くは、長い歴史を有し、国民への食料供給にとどまらず、国土の保全、良好な景観の形成、伝統文化の継承等に大きな役割を果たしてきました。こうした多面的な機能を有する棚田について、その保全活動を推進すること等を目的として、農林水産省は、平成11年に、優れた棚田134地区を「日本の棚田百選」として認定しました。しかしながら、棚田地域の現状は厳しく、担い手の減少や農家の高齢化等により従来のような保全活動が難しくなり、棚田は荒廃の危機に直面しています。

このような状況の中、令和元年には、待望の棚田地域振興法が施行され、その趣旨に基づき、着実に、棚田地域の振興に向けた取組が広がっています。

そこで、この機会を捉えて、農林水産省では、棚田地域の振興に関する取組を積極的に評価し、国民の皆さまに、棚田地域の活性化や棚田の有する多面的な機能に対するより一層のご理解とご協力をいただくことを目的として、改めて優良な棚田を認定するポスト棚田百選の取組を実施しました。

2 ポスト棚田百選の名称及び選定・認定について

ポスト棚田百選の名称については、農林水産省のホームページに応募フォームを設け、1か月間名称募集を行ったところ、全国から473件もの応募があり、関係省庁推薦や関係団体の外部有識者からなる選定委員会（委員長：山路永司棚田学会会長）において議論した結果「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に決定されました。



■つなぐ棚田遺産認定（農水省 HP）

また、つなぐ棚田遺産の選定基準は、令和3年10月28日に開催された第1回選定委員会において、日本の棚田百選の選定基準を踏まえつつ、令和元年に施行された棚田地域振興法の基本理念の視点を加え次のとおり設定されました。

①次の要件を満たす棚田であること

- ・積極的な維持・保全の取組がなされ、今後もその取組が継続される見込みがあること
- ・原則として、勾配が20分の1以上の一団の棚田が1ha以上あること
- ・棚田を含む地域の振興に係る取組に多様な主体・多世代が参加していること

②次の項目のいずれかに関する取組が優れた棚田であること

- ・農産物の供給の促進
- ・国土の保全、水源の涵養
- ・自然環境の保全
- ・良好な景観の形成
- ・伝統文化の継承
- ・棚田を核とした地域の振興

つなぐ棚田遺産の募集をしたところ、全国から多数の推薦がありました。令和4年2月14日に開催された第2回選定委員会において、これらを選定基準に基づき審査したところ、271棚田がつなぐ棚田遺産として選定されました。

選定された棚田は、令和4年3月25日につなぐ棚田遺産認定式（WEB）を開催し農林水産大臣名での認定証を授与しました。

3 つなぐ棚田遺産を盛り上げるための取組について

本取組の周知を図るために「つなぐ棚田遺産ロゴマーク」を作成しました。

また、選ばれた棚田地域を一層盛り上げるために、



■つなぐ棚田遺産フェア（新宿宮崎館）



■山形の棚田カレー（農水省食堂さくら）

首都圏のアンテナショップを核にして棚田を一斉に周知するとともに棚田関係の産物を展示・販売する「つなぐ棚田遺産フェア」を14県13のアンテナショップ等で開催（令和4年2月15日から4月14日）しました。

さらに、山形県の協力を得て、農林水産省の食堂において「つなぐ棚田遺産認定記念メニュー」として、実際の棚田を測量したデータをもとに3Dプリンターで作成したライス型で、棚田米を使った「山形の棚田カレー」を提供（令和4年3月25日から4月15日）しました。

加えて、つなぐ棚田遺産の取組を、企業、団体等の多様な関係者とともに幅広く周知するとともに、棚田地域の振興に資する取組を促進するため、「つなぐ棚田遺産」オフィシャルサポーター制度を創設しました。ふるさと納税に関する企業や観光・旅行業者、メディア等20の企業（令和4年7月末時点）がオフィシャルサポーターとして活動しています。

引き続き、更なる企業連携の促進や広報等の棚田地域振興に取り組んで参りますので、よろしくお願いいたします。



■オフィシャルサポーター（株式会社さとふる HP）

棚田と生物多様性

福岡県保健環境研究所 専門研究員 中島 淳

現在、主要な環境問題の一つが生物多様性の保全である。生物多様性とはその地域にもともと存在した生態系・種・遺伝子の多様性のことであり、生物多様性の保全とはそれらを減ばさないよう後世につないでいくことである。日本には生物多様性基本法という法律があり、また持続可能な開発目標（SDGs）における17の目標の一つに生物多様性保全が挙げられるなど、我々の社会にとってその重要度は急速に増しつつある。さて、棚田は人工的な環境である。それでは、人工的な環境である棚田は、生物多様性の保全に反するものなのだろうか？ 答えは否である。

生物多様性保全上重要な「環境」には大きく2つあり、その1つはほとんど人の手が入っていない「原生的な自然環境」、そしてもう1つは人の手が常に入っている「二次的な自然環境」である。人の手が入っていることが生物多様性の保全につながるというと、不思議な気がするかもしれない。

日本の生態系においては、梅雨時期から台風時期にかけての降雨による増水、河川の氾濫等による「環境の攪乱」は重要な自然現象であり、実は、こうした攪乱環境を利用する生物が数多くいるのである。例えば、トノサマガエルやドジョウ、メダカ、ゲンゴロウやタガメなどである。これらの生物の名を聞くと、ある環境を思い出さないだろうか？ そう、それは水田である。水田は重要な「二次的な自然環境」の一つなのである。



「広内・上原地区の棚田」で行われた生き物の観察会

日本では自然の攪乱環境を利用して、水田を中心とした里地里山が作られてきた。したがって、特に河川の氾濫に伴う自然の攪乱環境というのはほとんど失われてしまったが、同時に、人工的な里地里山の水田地帯における定期的な草刈、木の伐採、水田への水の出し入れなどの管理が人為的な攪乱となり、自然の攪乱環境を利用する多くの生物の生息場となってきた。こうした環境を「二次的な自然環境」と呼び、生物多様性の保全上、きわめて重要な環境として位置付けられている。

しかしながら現在の日本では平地の氾濫原は水田からさらに都市へと改変され、また平野部の農地では近代的で大規模な圃場整備が進展した結果、こうした「二次的な自然環境」において長い時間人間と共存してきた多くの生物が棲みかを失いつつある。実際にトノサマガエルもメダカもゲンゴロウも絶滅危惧種となっしまい、地域によってはすでに絶滅してしまった。そうした状況の中、現在の棚田は、平地の攪乱環境を追われた多くの生物たちにとって、最後の砦として、生物多様性保全上きわめて重要な環境になっているのである。

それほど重要な棚田であるが、担い手の減少によって水田として維持されている場所は確実に減少しつつある。生物多様性保全の観点からは、棚田を水田として維持すること、またそれが無理でも水を張ってビオトープ化して適切に管理するなど、二次的自然環境として生物の生息場としての価値を高めていくことが必要である。生物多様性の保全は前述したように環境問題の一つである。これまでは、その悪影響を我々が直接的に感じる事が少なかったため、その対策は後回しにされてきた。しかし、すべての生態系そして生物はつながっており、1種、2種と生物が絶滅していくにつれてその悪影響は確実に蓄積されてきた。今



棚田で暮らすたくさんさんのアカハライモリ
(環境省レッドデータブック準絶滅危惧)

年になって、アサリの産地偽装問題のニュースが連日大きく報道されたのを覚えている方がいるかもしれない。この問題は、「そもそも干潟にアサリがいなくなってしまう」という現実が根幹にある。すなわち生物多様性の破壊により生じた環境問題である。

近年のいくつかの研究で、山林の生物多様性の豊かさは、川や水田地帯を通して、沿岸域の生物多様性の豊かさにつながっていることが明らかにされつつある。つまり、棚田にカエルやゲンゴロウがたくさん生息することは、川のアユやウナギを増やし、干潟のアサリやハマグリを増やすことにつながっていくのである。

棚田は生物多様性保全上重要な環境である。生物多様性豊かな棚田を未来へつないでいくことは、豊かな社会をつくっていくことにつながっている。

美作市上山地区の棚田、 これまでとこれから。

NPO 法人英田上山棚田団理事 水柿 大地



棚田で暮らすヌマガエル

岡山県美作市上山地区は10の集落と65世帯160人の住民で構成されています。この地区には奈良時代から築かれた棚田があり、かつては8300枚の棚田があったという記録が残っています。上山地区の写真を50年近くにわたって撮り続けているアマチュアカメラマンの高田昭雄氏の写真を見ると、1970年代初頭までは8300枚すべてとまではいかないまでも、素晴らしい棚田の景観が残っていたことが確認できます。1970年代後半以降、

担い手の減少と高齢化によって棚田の耕作面積が次第に減っていきました。そうした状況を食い止めようと、平成に入ってから上山地区の中でも特に見栄えのする「八伏集落の棚田」の保全事業に取り組んだこともあるそうです。しかし、そこに暮らす人だけに頑張ってもらおうと行政が支援を行っても長くは続かず、再び荒れ地が増えていくこととなりました。

1975



2008



高田昭雄氏撮影 八伏の棚田

そんな上山に第一の転機が訪れたのは2000年代に入ってからのこと。一人の男性が退職後に田舎での暮らしを求めて関西の都市圏から上山に移住したことに端を発します。その男性＝石黒豊彦さんは上山に移住したのち、地域の方から農業を学び、地区の水路掃除や道の草刈りといった仕事にもイチ住民として参加するようになりました。しかし、上山の人口減少や高齢化していく集落の現状を目の当たりにし、身をもってその大変さを実感したことから、大阪に住む息子を手伝いとして呼ぶようになります。さらに、その息さんが大阪の異業種交流のメンバーにも声をかけて、都市住民が上山で週末里山生活をする「英田上山棚田団」を結成しました(2007年)。2週間に1回のペースで10～20名の都市住民がやってきて、棚田の保全活動や地域の仕事への協力活動が継続的に行われるようになります。そして、棚田団の活動がはじまって3年が経過した2010年、第二の転機が訪れました。美作市が地域おこし協力隊



2022年9月29日ハゼ干し完了後

制度を導入し、上山で定住して活動をする人材を募集します。筆者は当時21歳の現役大学生でありながら、第1期美作市地域おこし協力隊の3人のうちの1人として採用をしていただき、東京から移住して地域住民や棚田団メンバーと協力して棚田の再生を軸に活動をしていくこととなります。以後、棚田の再生活動の他、空き家の改修や地域の伝統文化(祭りや炭焼き等)の継承を行い、移住者の受け入れも美作市や上山地区と協力して積極的に行っていました。今では地区人口160人のうち40人以上がこの10年あまりで上山に移り住んだ人たちです。移住者の多くが棚田で農業をしながら、自らのスキルやこれまでのバックボーンを活かした仕事を兼業で行っています。木工・藁細工、移動販売、古民家の宿、狩猟、貸農園、高齢者の生活支援、キャンプ場、カフェ、医者など多様な仕事に従事しており、それが地域資源を再発見し、磨くことにつながって地域としての魅力を向上させ、新たな移住者や外部から関わってくれる方を増やす好循環を生んでいます。英田上山棚田団は2011年にNPO法人化し、メンバーも通いの方が中心だった活動初期から、現在では移住したメンバーを中心に活動を行い、それを地域外から通うメンバーが支える体制へと変化してきました。上山の活動を支援してくれているのは個人だけでなく、民間企業や大学等、毎年数多くの団体も棚田の保全に関わってくれています。地区の住民の頑張りはもちろん必要ですが、資金援助のみを行うだけではいずれ限界がやってきます。ライフスタイルの中に「棚田」との関わりをもって暮らす人をどのように地域内外に増やしていけるか。2021年度「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に選定された棚田地域にはそれを

模索し続けることが至上命題です。上山では「ライステラス（棚田）」が人々の「ライフ（暮らし）」を明るく照らしていってくれることを目指して、「ライステラス・ライフ照ラス」を標語として地域内外の方が棚田に主体的に関われるよう会員制度や活動内容の見直しを行っています。この文章をお読みいただいた方々とも何かしらの連携につながり、それが棚田の未来を明るく照らすことにつながっていってくれることを願っています。

日本の棚田遺産紹介

本号から棚田学会通信の「日本の棚田百選紹介」のコーナーもリニューアル、「日本の棚田遺産紹介」として、つなぐ棚田遺産の棚田を中心に今後も紹介をしていく予定です。（棚田学会編集委員会）

「農地を守ることは、生活の場を守ることだ！」

先人が守り、伝えた想いと「今」

— 檜池の棚田群（新潟県上越市） —

上越市地域おこし協力隊 高木 桂

はじめに、なぜ地域おこし協力隊がこの檜池の棚田群について紹介するのかを書いておきたい。

ご存知、「地域おこし協力隊」は、都市地域から人口減少や高齢化等の進行が著しい地域に移住して「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図るという総務省の制度である。

そんな上越市清里区檜池（くしいけ）地区にやってきた「ヨソモノ」は、中山間の棚田地域を守るた

めの活動である上越市檜池地区指定棚田地域振興計画の「棚田等の保全」における「担い手づくり」として、地域マネジメント機能の強化を図るため受け入れられたのである。

さて、「檜池の棚田群」は、12の集落がそれぞれに棚田を持ち、約2,000枚の棚田を集約した形として、地区一体型の営農体制のもと様々な活動をしている。

米どころ新潟の中でも雪深い山あいの里、上越市清里区檜池地区は、四季折々の豊かな自然に囲まれた農業を基幹産業とする地域だ。冬には2～3メートルの雪が積もる豪雪地帯だが、深山に生えるブナの森から豊富な雪解け水が檜池川に流れ込み、美味しい米を作ってくれる。

農地を守るため、地域住民が本気で取り組む活動が評価され、平成20年と平成29年に2度も天皇杯を受賞している。

地区のシンボル坊ヶ池は標高500メートルに位置し、県内の自然湧水湖では一番の深さで、湖畔にたたずむ上越清里星のふるさと館では100年前に落下した檜池隕石の展示や県内最大級の反射式望遠鏡での天体観測、館内のプラネタリウムでは四季折々の星座や天体シミュレーションが体験できる。

こうした棚田を核とした地域振興活動ができるのは、先代達が残したこの棚田があるからである。今回、キャッチコピーとして「農地を守ることは、生活の場を守ることだ」と掲げたが、この言葉は、地区内で活躍する農業者が胸に秘めた想いであることを紹介したい。

話は戦後の農地解放まで遡る。自作農として活躍してきた大正・昭和一桁世代の先人達が壮年を迎える頃、高度経済成長の時代となり、小型ながら機械体制が整い始め生産性向上を目指す時代へ突入する。その頃平場ではピークを迎えていたほ場整備事



冬の豪雪棚田



稲刈り体験ツアー

業に、条件不利地である櫛池地区も昭和50年頃着手した。これは、「親父世代」が次世代へ山の田んぼを残し、そこに住み、守り続けてもらうために戦った結果だ。しかし、次世代がそれを引き継ぐ頃には、生活水準の向上や働き盛り世代の生活様式の変化から、離農や都市部への人口流出が進んで止まない。このままでは農地を守れなくなり、ひいては生活の場の荒廃が危ぶまれるようになることを食い止めるため、平成4年度に農作業支援を主目的とする公益財団法人清里農業公社が立ち上がった。また同時に、離農等の受け皿として有限会社グリーンファーム清里ができ、これが新たな地区一体型の営農体制のはじまりとなったのだ。

そしてこの地区一体型営農体制は、「清里一農場化計画」という構想の下、現在も成長を続けているのである。

この脈々と続く想いを守ることは、この地に住まい続け、農地を守り続けることであり、まさに「つなぐ棚田遺産」がここにあるのだと言えよう。



庭先集荷事業

寒川の棚田から久木野校区の棚田群へ

—久木野校区の棚田群（熊本県水俣市）—

愛林館（airinkan@giga.ocn.ne.jp） 沢畑 亨

久木野校区とは水俣市立久木野小学校の校区で、旧久木野村（昭和31年に水俣市に合併）と重なっています。水田は約100haでほとんどが棚田ですが、その中でも特に急傾斜で条件は悪いけど頑張って棚田を保全し、そうめん流しの寒川水源亭を長く続けている寒川地区の棚田を百選に申し込み、認定されたのでした。

棚田百選の認定は、寒川の皆さんは喜んでおられました。純粋に名誉だけが与えられるものと理解し

ていましたが、時が過ぎて、百選に限り参加資格のある補助事業（2014年度美しい農村再生事業など）が出て来たりしました。

https://www.ogb.go.jp/o/nousui/nns/miyakoirabu/f_event/utsukushii.pdf

そこで、つなぐ棚田遺産の話聞いた時には、認定を受けた棚田を対象とする事業が出てくるのではないかな、と思ったのです。同時に、久木野地区にはたくさん棚田があって、寒川地区以外の方も頑張っている棚田を守っていますし、集落営農の会社「久木野まるごと農場」もあって、せっかく申請するのなら久木野地区全体を対象にすれば皆さんも喜ぶのではないかなと思った次第です。

幸い、13年度に衛星写真による食味検査で当時植えられている80haの棚田すべてを見て回り、実情もある程度はわかっておりました。13年度から昨年度までに、耕作できなくなった棚田はもちろんありますが、通常の作業で畑に復活できるところばかりです。なお、久木野地区の耕作中の棚田を全部見た人は歴史上私が初めてではないでしょうか。細川重賢による宝暦年間（18世紀中頃）の検地も、



竹のたいまつで棚田を飾る「棚田のあかり」



籾の先端にのげが生えた香り米「もち万石」の花

戦後の農地解放も、地区ごとに担当者がいたはずですから。

現在、猪と鹿による害が増えてなかなか大変ではありますが、江戸時代以降先人の苦勞の結晶ですから、今後も頑張って守ります。棚田を応援するためにお米を買って下さいという「食べる田助手」では1トン近い注文がありますし、1俵12万円(売る時は100g200円ですが)で販売している香り米ももっと販売したいところです。

<http://airinkan.org>

つなぐ棚田遺産に選定されて

— 神在居の千枚田 (高知県梼原町) —

高知県梼原町 田村 俊夫

『あれから2年が過ぎた』

本誌に寄稿して。その間にながが変わったかと言えば、結論から言うとほとんど何も変わってはいない。それが田舎の良さでもあり、悪いところであるのかも。ただし、天命には抗えず、年寄りから一人また一人と鬼籍に入り、部落の人口は減少の一途。残された住民も大病などでやむなく耕作を放棄せざる得なく、いつときは2ha余りの千枚田の約半分が荒れた。

とはいえ、そのまま放置すると小さな部落は荒れ放題となり、野生動物が跋扈することになる。そうした危機感が住民全体に広がり、ひとまず1年荒らした田圃を手分けして耕作し稲穂がたなびく千枚田をわずかでも復活させることができた。残る3割ほどの田圃については前回も記した通り、梼原町が「神在居の千枚田は、未来へ託す町のレガシー」と位置付け、そこに今回の「つなぐ棚田遺産」への指定である。こうなれば、はなはだ勝手ながら町を挙げて保全に取り組みねば本邦初の千枚田オーナー制度を始めたパイオニアのメンツにかかわるといふもの。幸い「四万十川流域の文化的景観」にも指定された神在居の千枚田。その方向から大規模な棚田修復の予算を獲得できないものか。現在、所管する町教育委員会とも協議を進め、加えて部落を含めた地域においても集落営農の仕組みを構築中である。

『全国棚田(千枚田)サミット』

これも3年ぶりの正式開催。滋賀県高島市に町の農政担当職員とともに参加。分科会は本邦の棚田の第一人者とも言える、早稲田大学名誉教授中島先生が主宰の「棚田のまもりびとミーティング」に参

加した。そこそこ広い会場は各地で棚田の保全にかかわる人たちで、まあまあいっぱい。そこでの皆さんの発言を聞くにつけ、失礼ながらエライ肩に力入ってんなあ、と感じたが、今回の寄稿依頼に際して2年前の拙文を改めて読むと、人のことをとやかかく言えない。ガチガチじゃん。この2年で変わったことのひとつ。「なるようにしかならん」。部落の叔母ちゃんにも言われたこと。適度に力を入れつつ、関係各所とも協力しつつ、天から与えられた命の続く限り、身体が満足に動く限り、四国の山中にある千枚田の保全に努めていこうと思っている。



千枚田全景

事務局ニュース

- 棚田学会 2022 年発表会のお知らせ
2022 年 12 月 3 日 (土) 13:00 ~ 17:00
対面・オンライン併用で行います。
- 『棚田学会誌』24 号 投稿原稿募集
締切: 2023 年 1 月 10 日 (火)
論文(査読あり)、事例研究・報告・文献紹介
- 第 19 回石井進記念棚田学会賞候補者募集
自薦他薦不問 締切: 2023 年 3 月末日

棚田学会通信 第68号 2022年10月31日発行
発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagakkai@gmail.com